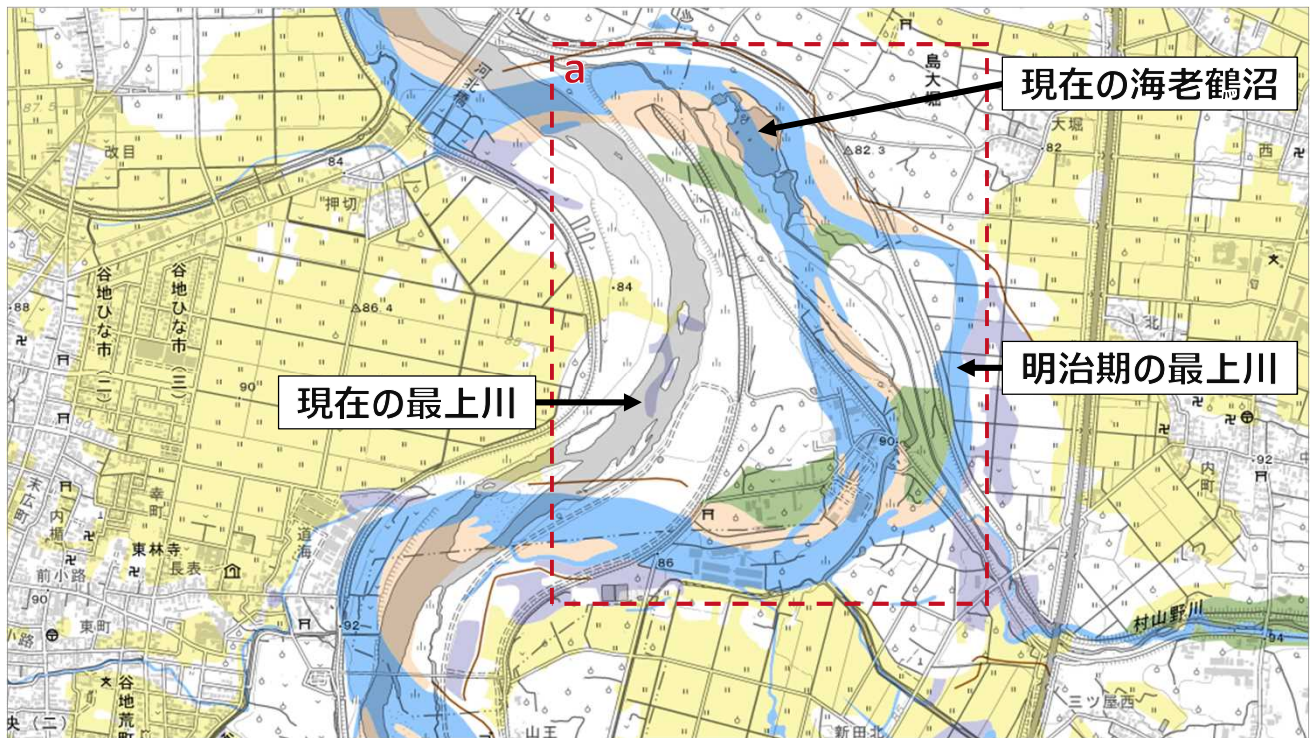




読図のポイント

- a. b. 石狩川や忠別川は、明治時代には現在の流路と比べて、大きく蛇行していたことが確認できます。
- c. 旭川駅は明治31年（1898年）に、当時の市街地の南側に開設されました。明治期の忠別川のほとりにあり、明治37年（1904年）に浸水が発生しました。

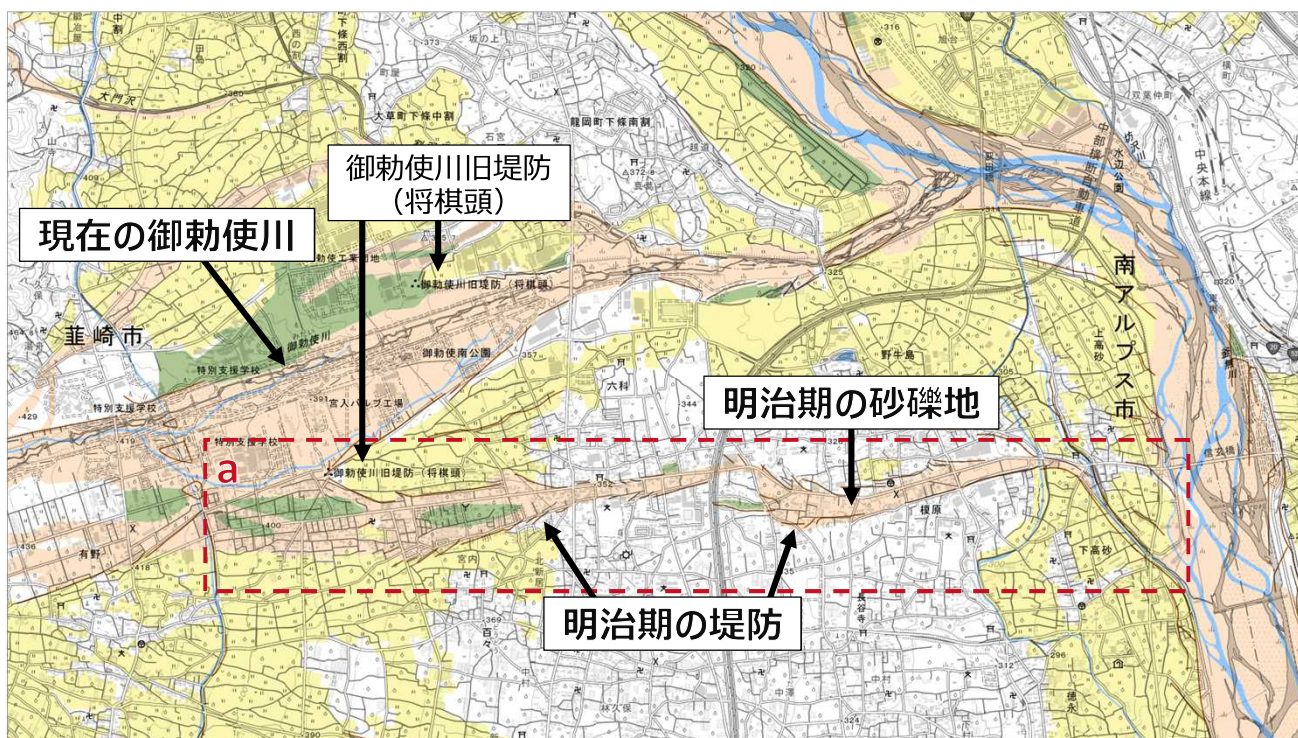
明治期の低湿地データの表示例2（山形県天童市） 資料4-2



読図のポイント

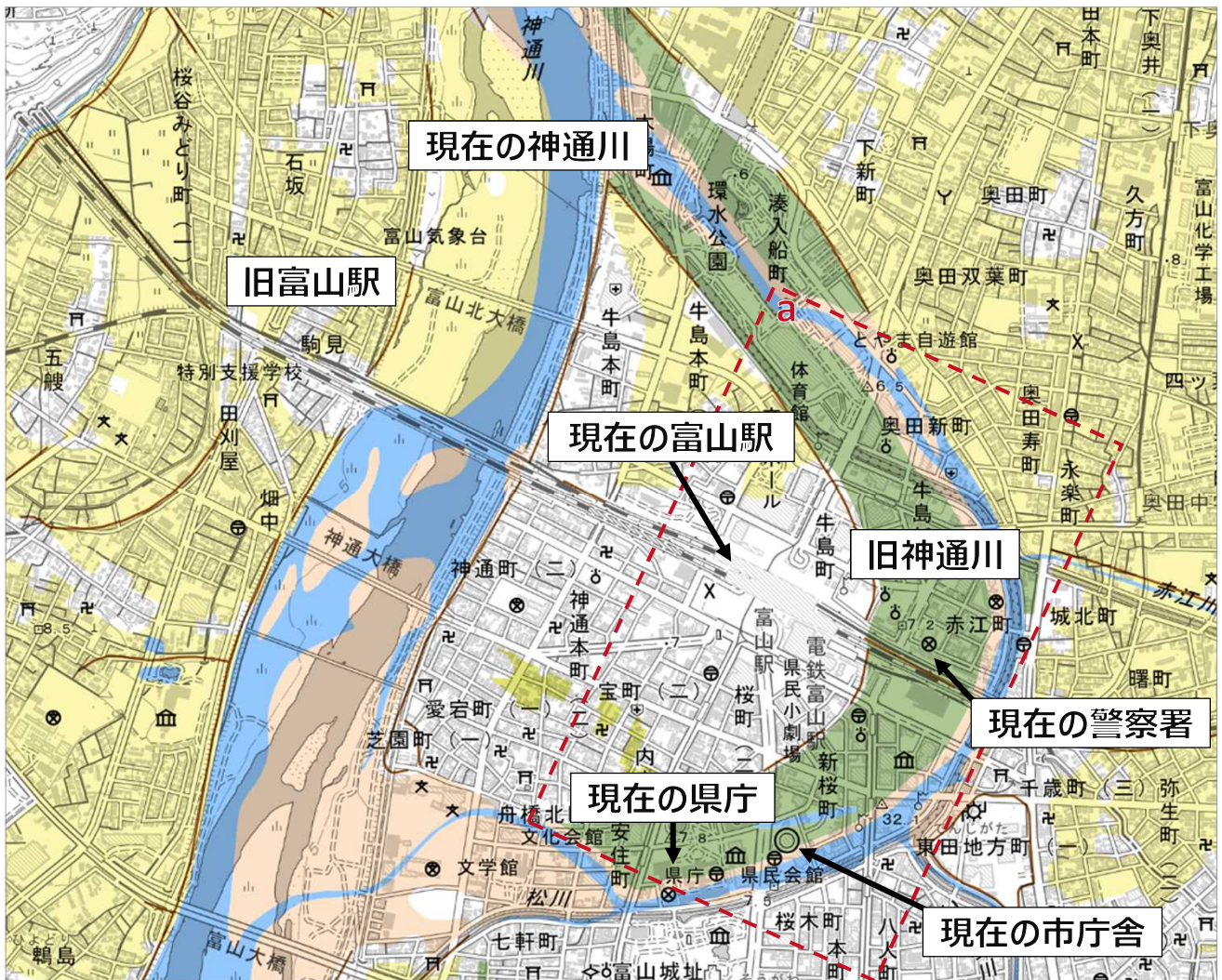
- a. 明治期の最上川は現在と比較して大きく蛇行していたことが分かります。明治期の最上川の跡には、現在、細い流路の河川と海老鶴沼と呼ばれる湖沼が位置しています。

明治期の低湿地データの表示例3（山梨県韮崎市、南アルプス市） 資料4-3



読図のポイント

- a. 御勅使川（みだいがわ）は、将棋頭と呼ばれる石積みの堤防によって分流されていました。低湿地データでは、かつて分流された河川の流路の跡である、砂礫地と堤防（霞堤）が見られます。

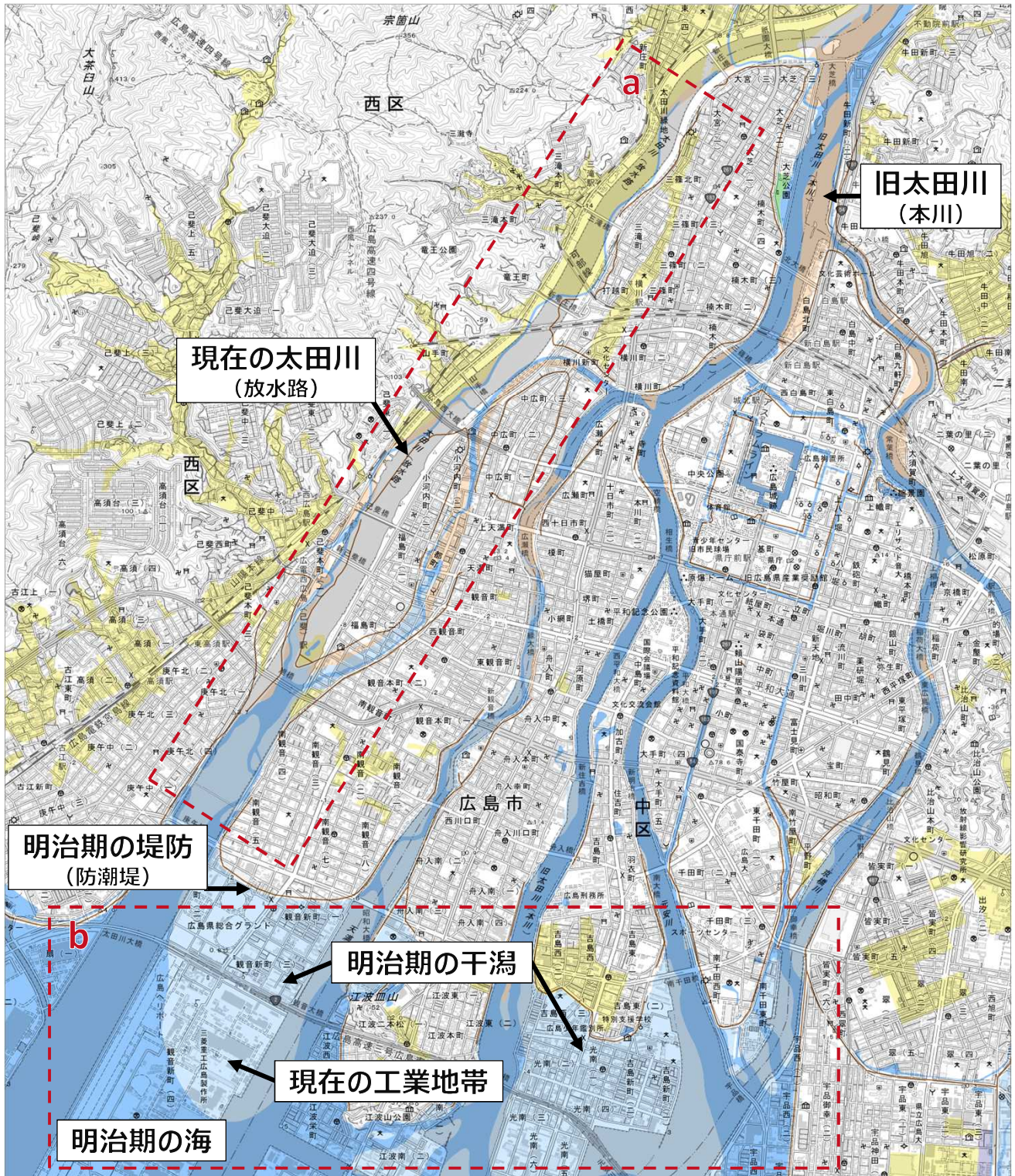


読図のポイント

- a. 富山駅は明治41年（1908年）に、神通川西岸の駒見から、現在の場所に移転しました。明治中期まで神通川だった場所には、現在、県庁や市庁舎などが位置しています。

明治期の低湿地データの表示例5 (広島県広島市)

資料4-5



読図のポイント

- a. 広島市内を流れる太田川は、かつては数条の河川に分れていて、しばしば洪水による被害を発生させてきました。太田川放水路の建設と堤防の整備により、市街地は洪水から守られるようになりました。
- b. 広島湾は埋立てにより、海岸線が前進し工業地帯へと変わりました。



読図のポイント

- a. 明治期の時点では、吉野川沿いのこの場所に水田がみられますが、明治40年（1907年）から昭和2年（1927年）にかけて行われた、吉野川第一期改修工事で拡幅工事が行われ、現在は河川となっています。
- b. 助任川（すけとうがわ）は徳島城の城山に面した河川で、b.地点は現在の約2倍の川幅がありました。明治期以降、河川利用の需要の低下、市内の人口の増加に伴い河川の埋め立てが行われ、市街地の一部となっています。



読図のポイント

- a. 明治期の博多湾は、より内陸側に海岸線が位置していましたが、その後の埋め立て事業により、船舶用の埠頭などが造成されました。
- b. 1600年ごろに築城された福岡城は、博多湾の入り江を外堀として利用していました。その後、昭和4年（1929年）には工事が行われ、県営大濠公園として開園しました。造園時に、城の南側の堀は埋め立てられました。
- c. 現在の博多駅は、昭和38年（1963年）に移転した場所であり、明治期には水田が広がっていました。